マリア様がみてる

～いばらの森のその後に～

Raytuel

サークル・クロスロード

マリア様がみてる
～いばらの森のその後に～

もくじ

いばらの森のその後に
　Raytuel ……7

あこがれ
　霧野知秋……73

早　春　譜
　是守 戦十郎……113

　　あとがき ……144

いばらの森のその後に

カバーイラスト／山月　総

私がその話を持ちかけられたのは、桜も散り、すっかり薄着でも過ごせるくらいになった晩春のことだった。

昨年の暮れに家業を義理の息子に譲り、今年の四月の身内だけの株主総会でそれが正式に決まって楽隠居を決め込んでいた私は、彼女からの電話に即答することが出来ずに困っていた。

宮廷社編集部の彼女が受話器越しに伝えてきたのは、あの日の話を小説にしないかという申し出。

今までだったらすぐに断っていただろう。

でも今回は少し違っていた。

あの日から思い出す度に痛みを伴っていた思い出の、痛みの部分だけを、半世紀という長い時間が覆い隠してくれた。

「もう少しだけ悩んでいいかしら?」

即答を避けたのは当然だった。

彼女もそれを予想していたのか『また後日』ということで受話器を置いた。

＊

彼女との出会いはもう五年くらいになるだろうか。宮廷社の新入社員として経済誌の編集部へ来た彼女が、編集長に代わって私の書いていた経済エッセイの担当になったのが出会うきっかけだった。

彼女は若さに溢れ、力強くて快活で。

そんな彼女の姿に何もかもを忘れたくて、ただ仕事に打ち込んでいた自分が重なった。

二十代の時に父親と母親が交通事故で急逝したため、突然にやってきた会社の経営という仕事。明らかに私を見下す様な取引先の数々に、私は負けずにやってきた。苦しいときも不条理なことに頭を下げなければいけないときも、あの冬山で失った物の大きさに比べれば些末なもので、プライドを守って死ぬくらいなら、自分から投げ捨てて生き残ることを考えて続けてきた。それが彼女に出来る私の唯一の贖罪なのだと言い聞かせながら、惨めでもいいから彼女の分も生き続けると心に決めていたから。

それから私は短い結婚生活を送り、娘をもうけ会社経営の傍らで育児をして、本当は逆じゃなきゃいけないのに、そんな母親失格みたいなことをしても娘はしっかりと自分で育ち。

『家事は任せて、お母さんは私だけのお母さんじゃないもの。社員五百人のお母さんなんだか

ら、そっちを頑張ってよ！』

と、逆に勇気を貰う始末で。私に似たクヨクヨする様な子供にならなくて本当に良かったと思う反面、しっかりしすぎてお嫁の貰い手がないのではないかと心配したりもしていた。

でも、娘のウエディングドレス姿に涙したのも思い出の一つ。義理の息子もじゃじゃ馬な娘を良く見守ってくれるいい人だった。

そんな楽隠居の私が小説を引き受けるかどうか決めかねていた。

数日後、私は旅支度を調えて一人で電車に乗った。

今まで行きたくも思い出したくもなかった、あの佐織（さおり）との最後の場所に再び行ってみたいと思ったのだ。

あの頃とは当然だけど時代が違う。

車での移動に慣れた私は少々戸惑いながら、東京駅までの切符を買い電車に乗り込んだ。

実家はとっくに売り払っていたから、今住んでいるのは若くして死んでしまった夫の家で、旅行の出発点にあの駅を使うほどセンチメンタリズムに囚（とら）われることなく、私はあの駅を目指した。あのときは深夜から朝まで掛かっていた距離も今では数時間となり、二人で雪景色を見つめた電車の窓も今は開かず、もちろんすきま風なんか入ってこない。あのときのままなのは山並みだけで、延々と続いていた白く雪の積もった畑は所々で住宅地になり、大きな道路が併

走するにまで変わっていた。

私は鞄の中から手帳を取り出す。その中に入っている黄色くなり、所々が落ち葉の様に脆（もろ）く崩れてしまった切り抜き。

引っ越しのときに何度も捨てようと思ったそれは、私と佐織が確かにそこにいたことを証明する唯一の物として、私の手元に残っていた。

忘れたい過去、捨ててしまいたいと思いながら、私は結局この歳まで、未練たらしくそれを抱えて生きてきた。

そして私は電車を乗り換え、あの駅に降り立った。

あのときの面影は駅のどこにもない。

当時の私はただこれからのことだけに一生懸命だったから、周りの風景なんか見ている余裕なんかこれっぽっちもなかった。

記憶の糸を頼りにしても駅名程度しか憶えていない私に、既視感（きしかん）が湧く訳もない。

山から吹き下ろす冷たい風を受けここに立ちつくす訳にもいかず、私は自動改札に切符を入れて駅前の広場に出た。

雪は消え、駅前のロータリーにはアスファルトとどこかの旅館の送迎バスの看板、そしてまばらにこの辺りで生活している人の人影がある程度。木造だったあの頃の家並はとっくに立て直されていて、よく見る田舎の駅前の情景そのものだった。

記憶を頼りに歩き出す。

所々で家に邪魔されながら、人目を避けるためにわざと裏道を歩く。しばらく行くと山道の入り口を見つけた。あのときは細くて一人で歩くのがやっとの道だったはずが、今は車の轍（わだち）の跡が何本も残る道になっていた。

真新しい緑が太陽を遮る。そして鳥の声や葉の揺れる音で満ちていた。雪に音を消され冷たい風の音しかしなかったあの山。私たちが命を終わらせようと思った山は、季節が変わり生命に溢れた詩を奏（かな）でながら今もそこにあった。

砂利道をゆっくりと登っていく。

そして一本の獣道へ、多分ここだろうと思った場所に私は入っていった。あのときを思い起こしながら、幾重にも腐葉土（ふようど）の重なった柔らかいスポンジのような山道を歩く。所々で足を滑らせそうになりながらあの場所を目指した。

三十分ほど歩いた頃だろうか、私はふと立ち止まり周りを見渡した。

もしかしたらあのときは雪のせいでもっと歩くのが遅かったかも知れない。そうするともうその場所からかなり遠くに入ってしまったのではないか。

気づいたときには、どっちが戻る道だったのかさえ分からなくなっていた。

そんな大きな山ではないからきっと下に降りていけば良いだろうと考えていたが、山登りをする様な服装ではない私の格好では服をあちこちに引っかけて、靴が滑って転んでしまいそうになること幾度か。明らかに来た道でないことを自覚しつつも、緩斜面をゆっくりと降りていくしかないと思っていたとき、不意に声を掛けられた。

「どうすますた？」

声が聞こえた方を見ると、茶色い上下で腰に鎌をもったご老人が――失礼どうみても私の方がおばあちゃんよね――が立っていた。

「ちょっと、用事がありまして」

「はぁ、ウチの山にあんたなんのようかね？」

「私有地だったの、ごめんなさい知らずに入ってしまって」

「いやさ、地元の連中ならすっちょるはずだが。あんたヨソの人かね？」

「ええ、東京から」

不法侵入で不審者な私に男性は笑顔で、

「まぁ、そげな所あるいとらんと。こっちの方があるきやしいよって」

そう言われれば、私は獣道のすぐ横を歩いていたらしい。私は男性に手を支えて貰い、男性と同じ獣道に出た。

それからその男性は獣道を私を案内するように前を歩き、草をかき分け、歩きづらい所は私の手を握ってくれた。まぁ男性が軍手なのは仕方がない。

「良く遠くからウチん山の中にキノコ取りにくるのはいるが」

と言いながら男性は私の服装を見て、
「あんたばぁ、何をとりにきたんだね」
「いえ、ちょっと思い出の場所に行こうと思って」
「……思い出ねぇ、ウチの山ん中で思い出……」
「この山で心中の話をご存じですか、お気に障ったらごめんなさい」
自分の土地で縁起でもない話をされて嬉しい人がいる訳はない。でも悪い人には見えなかったし、このまま警察に連れて行くようにも思えなかったので、私は本当のことを話すことにした。
「……あの、事件の関係者かいあんた」
男性はあのときのことを憶えていた。
「ええ」そう私はつぶやいて、一回だけ言葉を飲み込んでそれを伝えた。
「私がその心中を図った女学生の一人です」
「……わしはじいさまから聞いただけだがね、あのときのことはよーおぼえちょるよ。大人たちがわぁわぁさわいじょったからね」
「ご迷惑を」
「いやぁ、わすは子供だったからただみとっただけだ」
男性は少し笑う。
「実はお参りに来たんです、自分にけじめを付けるために」

「そうかぁ、わすがじいさまに聞いた場所でよければ案内するが、いってみるかね？」
私は頭を下げた。
「よろしくお願いします」

「こっから十分くらいだぁ」
男性は指を指して案内してくれた。
男性が祖父から聞いた話だと、男性の祖父が自分の家から炭焼き小屋に炭を取りに行く途中、見慣れない足跡を見つけたそうだ。家族の誰かかもしれないと思ったが、出るときには家の中に出稼ぎの息子以外末孫まで全員いた。不審に思い足跡を追いかけてみたら倒れている二人がいたというのだ。時間から言って、私たちが薬を飲んで意識を失い一時間も経っていない頃だと思う。
そこは生活に使っていた通り道だった。そのおかげで私は死に損ない深い凍傷を負うことなく助け出された訳だ。
「診療所さぁ運ばれるまでウチに運んでなぁ、いやぁなんて綺麗な人なんじゃろと思ったわ」
「いまじゃしわくちゃよ」と苦笑する私に、
「あっはっは、おらもだぁ」と男性は大笑いして、「ちょうどそこさぁ、坂登った所だで」と指差した。